しといひしに、喜びて見給ひしが、その遊びの興ありけむ事どもまさに目に浮べり。はたこの玉の聲々の中に、やつがりをしもおもほし忘れず、とある折もかくある折も、いひ出で給へるなさけの露、せばき袖に餘りて覺ゆれば、せめての心遣にこをむくいまゐらす。このごろなほうつそみのよの事繁ければ、よく思ひめぐらすべき暇なし。さだめて墨繩ののりに叶はぬ事の多からまし。唯思を述ぶる一方を一わたり見給はむ後、やりすて給はなむ。いさや川の水くづなど申さむは中々事かましや。この月の名も白く霜寒き朝な夕な、よくまもらひ給へ。春立たば大城の下にもまゐりてむと思ふはとげなむや。もしさらば、その折聞えまつらむ。あなかしこ。

△いさや川―近江の名所。

△荷田刀自―蒼

贈江戸縫子書

荷田刀自の歌共を集(ツド)へて、杉の下枝と名づけられつるは、その門に學び給へる君がいさをとか。こを村田ぬしの許よりおくり給へるが、希らしう、古の手ぶりの、なだらかにけだかき樣に心醉ひぬ。されば、打思へるままの一くさをかいつけてなむ、ゐやまうすしるしとす。

稻荷山、舊りにし道に、のぼりける、
あともかしこき、杉の下陰。

近江に籠りし時、矢部久子が尼に
なりぬと聞きて送る書

過ぎにし頃、人に誘はれて鏡山へまかりし折から、圖らずも兄の君に出であひまゐらせて、立ちながらに承はりし御物語どもは、誠にや卯月五月と打つゞきて柞葉(ハハソバ)も撫子もなくなり給ひ、君はた飾おろし給ひぬとか。もとより定めなき世の有樣は、思ひ知らぬにも侍らぬ身の、猶これは明けぬ夜の夢かとのみなむ辿られて、聞えさすべき言の葉も侍らず、今

生子、在滿の妹、天明六年二月二日歿、年六十五。杉の下枝二卷及家集あり。

△鏡山―近江の所。

は一昨年にや東へ赴き給へりし折御送りの歌も詠みたりしかど、まゐらせむと思ふ間に、御本意違ひぬるなど、風の便に承はりしかば、中々にて止み侍りにき。その後は、いかにせさせ給ひぬるかと、折ふしに思ひやりまゐらせぬにもあらねど、やつがりも、去年の秋より、此の里にのみ引籠りて、京の事も打絶えて聞き侍らず、まいて御上はいかにと聞きあはせむやうもなくて過ぎ侍りにき。かうやうの事は、今更申さむもつきなけれど、かはりぬる御上のあはれに思ひつゞけらるゝにつけて、疎くあり經し事のやうを申し侍るなり。若し美濃の中山越えさせ給はむ便もあらば、このわたりへもおはしませかし。今は世の外の樣にて輕らかにおはしまさむからには、何の憚もあらじ。世は背き給ふとも、敷島の道の情はえ捨て給はじ、樣かへ給ふにつけても、定めてあはれなる御言の葉ども積り侍らむ、必ず聞かせ給へ。

安永六酉年夏五月中四日やむごとなき御事のかくれ給へる後、其の御内に侍ふ女房へおくる文

思ひかけぬ御事は、餘所にても夢のやうなるを、いかなる心地かし給ふらむと、聞えさせむことの葉も侍らず。御葬果てぬ程は、何のあやめもわき給はじを、かたほとりの山賤の、さしいでて訪らひ參らせむも、中々つきなくやと、靜めておくれ侍りぬ。烟に添はぬ旅の悲しさといふめる歌も、おぼし知られなむと悼ましきに、

君が往く、西の御空を、仰ぎては、
おくるゝ身をも、月にかこたむ。

この別れのみ、尊きも卑しきも、せむすべなきほどを、おぼしあきらめて、唯阿彌陀佛を拜みまゐらせ給ふこそ、今の御仕へにては侍らめ。この箱ものは、いさゝげながら、喪ごもりの御徒然を慰め參らするばかり

になむ。

和泉國蹲尾北村道治死去之後爲弔未亡人寄堺津澤田光熙書

澤田ぬしへ申し侍る。かの北村ぬし身まかり給へる折、とみにことも て訪らひ侍りなむを、その名殘のあるやうをも知らず、境遥に隔たるもの から、思ひつゝ過し侍るを、そのむかひ給へる人なむ遺す形見の撫子を生 ふし立てゝ、空しき閨を守らひ給ふと承はり侍るは、いとすさうにもあは れにも侍る事よ。去年の文月、かの家に遊びし折、七夕祭り給ふを見侍り しが、いつしかその頃のめぐりくるにも、星の妹脊のためしには似ぬ人 の世の樣の思ひやられて、折節の哀え忍びあへず。かのおくれし人を訪 ひまゐらす。一くさ一葉葉散る風の便にも傳へ給ひてむや。かつは涙す すむる種にもやと、ためらひ侍れど、又思ひやる人もありけりとおぼさむ は、心一つに思ひ沈み給へるよりまされる方もやと思ふぞかし。さし過 ぎたる事にも侍らむか。よくはからひ給へ。その一くさは、

星合の、影仰ぎても、片敷の、
袖に落つらし。天の川波。

又なき人のすい給へりしゆかりに、歌をしも斷えず物し給ふと聞ゆる はいとよきつれ〴〵のまぎらはしに侍らむに、なき手向にも侍らむ。ま いて佛の道の山口ならじやは。

言の葉の、道を知るへに、後の世も、同じはちすの、契りたのみね。

とぞ聞えまほしき。

贊

題千秋萬歲圖

せんずまざいよ。蛭子のあれますさまより、大御殿造らふ柱の數をか

ぞへ、市路に物賣るをまねぶなど、くさ〴〵のさるがふごとも、事舊りたるものから、初春毎にめづらなる心地して、老も若さも皆腹をさゝへ、腮（アギト）を解くなむ、治まる御代のめでものなりけり。

△腮を解く―解頤の當字。漢書匡衡傳、匡衡說レ詩、解ニ人頤一に因る。口を開いて笑ふこと。

松飾る、門に聞えて、のどけきは、
千代萬代と、鼓うつこゑ。

七種の若菜を髭籠に籠めたる畫に題す

かきかぞふ七種を取りよろひて、籠に籠めたるなむ、人の日てふ今日を過さぬ野守が心疾さか。をとめらがしわざか、その野邊の雪消もさぞと知られて、吾もいで袖ふりはへてとぞ思ひなりぬる。

宿ながら、春の光を、見るものは、
今日摘みはやす、若菜なりけり。

△髭籠―圓き籠の竹の端を殘して長く編みたる籠。今も蜜柑などを容るるに用ゐる。

△人の日―舊の正月七日を人日といふ。

春の海邊の畫

時雨に雪に吹き荒れし風の名殘なく、よる波の音もゆたかなる春べなむ、海面（ウラ）はをかしうおぼゆれば、この題を出して人々と共に文作らむとす。

抑〻古は浪速わたりの春をめでけむに、今は大江の岸も田みの〻島も、大城（オホキ）の下にして、家居立ちつゞき市人も行き交ふ巷となりしからに、見所もなし。住の江こそ、これはた都遠からで、岸の向ひの淡路島山なぞ、朝夕に見ればこそあはと聞えしもことわりに、春の眺望はことに心とまるものから、人々もまづ思ひよるべければいはじ。これをおきてとおのが歩みの及びし限、遠近を思ひめぐらすまに、望月篤志、このかみ畫もて來て、是が上（カミ）にかいつけよとあり。渚の松はいづちにもあるべけれど、わきて松に名たゞるは、高砂の浦か。されど、それは尾上にこそいへれ。若し大淀の濱にやとつく〴〵見るに、この景色何となく和歌の浦に通ひたり。七本の松の一本をかけるにやあらむ。いつはとはわかぬ緣も今一

△和歌の浦―紀伊の名所。

△いつか云々―伊勢物語、鹽竈にいつか來にけむ。朝なぎに釣する舟はこゝに寄らなむ。

△妹脊―夫婦。

入の色添ふをりからのよせことに覺ゆ。冬だにも霜置かぬてふ南の海なれば、よそよりも深さ霞の限もなき景色、雲に雁が音、浪に船も、このうちにやこもるらむ。人間は〻見ずとやいはむとよみ給へりし曙の月も、秋よりあはれやまさるらむなど、かしこけれど、玉津島の神のめで給ふらむをさへかけて思ふに、寫繪といふことも忘れて、この浦にいつか來にけむとぞ。

あしわかの、浦の春べは、心から、
波の花さへ、香に匂ひつゝ。

上巳紙雛圖

こは上巳の祓に用ゐる人形よりおこれるならし。されば、其の禊（ミソギ）に用ゐるをも、あるは雛形ともいふかし。今樣に公卿の妹と脊の樣をまねびて、つきづきしうさうぞき立てゝ作れるよりも、昔覺えてすさうにこそ。

△鞠―蹴鞠。

△打毬―騎馬の人數を兩班に分ち庭上に各毬班に屬する子を置き、馬上毬杖を持ちて所屬の毬子を掬ひ相爭うて、毬門に投じて早く投げ入れる終へたるものを勝とする。

△遊技―成通―賀茂流。成通。賀茂流。

△雅經卿―飛鳥井雅經。飛鳥井流。

△柳櫻―鞠場の四方に柳櫻楓の樹を植う。柳の樹を懸（カケ）へ之を懸（カケ）さいふ。

やつがり若かりし時、相識れる人の口吟に「足ることを、知ればめでたし。紙ひいな」といへるは、年經れど忘れず。奢を却けてすなほなるもとつ世のふりを、家に傳へ給はむは、今日にあひたるよき祓にこそ待らめ。

題鞠畫

鞠は昔、若き人の翫びものにして、唐土の打毬（ダキウ）に同じきか。源氏の若菜の卷、狹衣の物語などにも、しか見ゆ。さるを、いつの頃よりか、おとなしき人も、立まじり、先には成通の大納言、このわざに妙なりけるとか。後には雅經卿なども、かしこき名とりて、世々に傳へて、その家とさへなりにける。こはこのものゝ幸（サチ）とやいはむ。されど、そはとまれかくまれ、おのれが元知らぬ道なれば、强ひても論はじ、柳櫻に契かけたるは、ものゝ中にも羨むべきものなりかし。

題賣茶翁肖像　近體

△偈―佛家の詩
△近世畸人傳―正續十卷、閑田翁の著、己曩に校注本一卷を著せり。

翁、氏は高、名は遊外、實は月海和尚なり。老に及び思ふ所ありて、俗に還るを名とせり。しかも、その操は、古德に恥ぢずして、みだりに信施を受くる事を欲りせず。煎茶を鬻ぐ、風流に隱れて、また賣茶翁と名乘り、花の春、紅葉の秋、勝地に莚を展べ、まらうどを延く、その事は、その偈を集へたる書につばらなり。己もさきに近世畸人傳を著はし、翁の傳をも收むるからに、此の肖像に題せよと、大館氏の需にあひて、いさゝけ筆を染む。はたおもへらく、

誰か知る。佛の法と、世の法の、
外に遊べる、人の心は。

畫老鼠智

この繪はある人まさに見たりとて物語せしもの、めづらかにて、大久保ぬしの手を借り侍りしなり。そのよしはまづ一つの鼠、この貝の赤らかに見えたるにやめでけむ。ふとよりて手まさぐりするに、うごめきたれば、驚きてとみに遁げなむとせしが、貝の口あひて、尾をはさまれぬ。いよ〳〵驚きてとかくすれば、貝はなほいたくしめて放たず。さる間に又鼠一つ出で來たるがこを見て足疾く去る。暫時ありていと老いさらばひて毛も斑に落ちたるが、ありくことかたくあらむ、古き藁鞋に乘りたるを三つの鼠かきものして來れり。淵明が足の氣ありけるさへ思ひ出でられてをかしく、何事をすらむと見るに、貝の所に老鼠這ひ上りてふるまふほどに、その口開きたれば、尾くはれたるものは辛うじて遁げ去る。老いたるはまた藁鞋に乘りて隱れき。そのわざは知らねど、老いてよく事に慣れて、かうやうの事にもたばかりありけるなるべしといへりしが、やつがりこを聞きて、二つ思ひ得る事あり、一つは老いたるが智の勝りて、よに益(ヤク)あるよし、かの清少納言のありごほしの神のもとつ故しるせるつらに、かゝるものゝ上にも違はざりけること。二つには、もの皆心あ

△清少納言―枕草子に出づ。

りければ、情あらむ人は、這ふ蟲の上までもかけて惠みを及ぼさゞらめやとなり。皆めづらしげなきことわりなれど、更にかゝることを見聞くには、志おこるものなれば、人にも見せてむとてなむ、また同じことをくりごとに歌ふ。その歌。

人ならぬ、物の上さへ、かくしあれば、
ひとはふるきを、あがむべらなり。
人ならぬ、ものゝ上にも、おしなべて、
人はあはれを、かけざらましや。

△幻住庵の記―全集に出づ。
△奥の細道―翁の俳文。

芭蕉翁畫像贊　以近體著

此の翁の氣韻清高なることは、己素より欽慕する所なり。こゝに見る所の一二を云はゞ、幻住庵の記に『あるじは心高く住みなしてことになし置けるもの好もなし、』又奥の細道に「清風は富めるものなれども志賤し

△本立ちて―論語學而篇、君子務本、本立而道生。

からずのごとき恥を知る人は自から省みざらむや。はた「松島は笑ふがごとく象潟は恨むがごとしの語句、眞景を寫し得て、さもこそと風人の魂を飛揚せしむ。俳諧は吾學ばぬ筋なれど、この頂相の題を需めらるゝにあひて、いさゝか欽慕の思を記す。

題龍門鯉圖　應平井宗晶需

千尋の瀧に臨む勢、やがて雲を起し雨を吐くらむと勇まし。されど、進む心に任するにはあらで、年月數多身を守りつとめて怠らざるから、かゝる時をも得にけむ。本立ちて道生るとこそ賢き人も宣ひけれ、あなたうと。

大津繪の三戯畫を若冲に寫さしめて持たるに、讃を乞ふ。予もまた戯語をもてす

相阪の關の戸ささぬ御代に逢ひて、行きかふ人の多かるまゝに、さまざまの姿どもをゑがきてあきものとす。それが中にも、この三くさはわきて人のいひはやすものなりとて、世に名たゝる繪師何某に誂へて寫さしめたるなむ、この家あるじのみやびなりける。さてしもあらで、又何にまれ、うはがきせよと、やつがりによせられたるは、いとよくもあらず。おぞき鬼の念佛唱ふること、似つかはしからぬ事とすまへど、ゆるさず。もとよりたわやめの持てる花のゆかりなき人にしあらねば、よしやめくら法師が、琵琶の人笑へもさばれとてなむ、犬の子のたふさぎにむつるるざれごとを、かいつけて興ず。

△おぞき―恐ろしき。

相阪や、繁き往來を、寫し繪の、
中に怪しき、影もまじれり。

題三　猿戲舞圖

物冒りしは耳見えず、獅子頭かづきしは眼くらかるべし。烏帽子したるはまさに口を閉ぢたり。遊び戲るゝ時といへども、三つの誡を忘れざるは、かしこしともかしこしや。

たはぶれて、起ち舞ふ程も、見ず聞かず、
いはぬましらが、操をぞおもふ。

小原女畫

都に近く住みながら、そのさまの鄙びたるをしも、中々にをかしきことにすめり。「秋の日に、都を急ぐ、賤の女が、暮るれば返る。大原の里」と京極黄門の詠み給へるをもて見れば、昔よりかゝりけむかし。今このうつし繪に題せよとあるに、いふべきふしもなけれど、只見るまゝを、

おのがどち、話らひつれて、賤の女が、
いたゞく眞柴、重げにもなき。

△京極黄門―藤原定家。黄門は中納言の唐名。

題鵺鳥畫

なべて物の情あり、心なきのわいためなく、相忌みおづるためしは、常のことわりもて論ふべきにあらず。おのづからのことなりけり。それが中に、蛙の蛇をおづるはさもありなむを蛇の蚯蚓（ナメクヂリ）をおづるはいとも怪し。こゝに此の鵺（ライ）鳥なむ、越の白山の松の木陰に隱ろひながら、天の原踏みとゞろかし、鳴神を避けしむる德あるこそくしき事の恨なれ。されば畫に寫して家の內に納むれば此の禍を免かるゝとかや、さきにやすらに住めるてふ古歌によりて、伊藤東涯事の所以（ユエ）よしを記されしもの、世に行はるゝからに、今はたいふべきふしもなけれど、此の圖に題すべきもとめにあひて、えいなみあへず、とみにえせ歌一くさをしるすは、人笑はれならむかも。

△鵺鳥ー雷鳥、鶉鷄類の鳥、高山に棲む、夏冬に其の羽毛を變ず。

白山の、神やおきてし。いかづちの、

このかほどりに、おづるためしは、

△かほどりー美しき鳥の稱。

三番叟畫・贊

このわざをきなむ近昔のものにさんばさと書けるを見しことあり。今なべて三番三の文字をすうるもひとしきか。千載翁（センザイオキナ）とついでてみたりにあたれゝば、然（シカ）いふにやあらむ。まことには、そのなのよしもことの心もえしらねど、立ち舞ひて眞鈴（マスヅ）ふるさまなど、神をすゝしむると覺えて、見も聞きも、心浮き立つものなりかし。

おもしろや。喜びありと、言揚（コトア）げて、
立ち舞ふ姿、振る鈴の聲。

閑田文艸卷之四終

大正十三年九月二十日印刷
大正十三年拾月一日發行

定價金壹圓三十錢

編者　佐藤仁之助

發行兼印刷者　竹内淳郎
東京市牛込區早稻田鶴卷町四三六

印刷所　友文社印刷部
東京市神田區三崎町三ノ一

不許復製

發行所　東京牛込鶴卷町
振替東京二三七三七
敬文堂書店

323
172

終